

発刊に寄せて

帆 足 望

我が国の歯科界は、他分野の社会或は企業体に比べて非常に鎖国的で国際性に欠け、此の社会は島国根性の典型の様な状態である。今日は、あたかも大平洋戦争勃発当時の国民意識と良く似てきている。大学人の海外視察旅行談を聞いたり読んだりすると、下度昭和十五・六年当時の日本人特有の島国感覚による外国歯科事情の教育・研究・医療の底辺の広さも深さもその頂点をも知らない無知蒙昧な談話が多く、日本の歯科界は非常に危険な独りよがりの時代に突入しつつあることがうかがえて、そぞろ寒さを覚えるのは私一人だけではあるまい。日本には現在二十三の歯科大学があるが、どうしてこうも同じ内容の大学ばかりできて、ユニークな大学ができないのだろうか。私は、当大学が伝統⁵⁰0年で将来に秘めたる可能性を持っていることに非常な誇りをもっている。茲に本誌が発刊されるに当り、歯科医学の研究のみならず、歯科医学教育の研究発表も盛んになり、本誌が教育と研究の併存を可能にして、またこれを通して、歯科医療が教育と社会奉仕の間の関係の発展に寄与することを望んで止まない。

発刊に寄せて

加 藤 倉 三

わが松本歯科大学の研究会誌が刊行されるに当って、所懐の一端を述べる機会を与えられたことは、私の大きな喜びとするところである。

昭和47年4月に開学した本学は、北村学長の提唱のもとに、将来学会を造る前提として学内における「学術講演会」を同年12月に開催することになった。この学術講演会が開催の回数を重ね「研究会」と名称を改め現在に至るまでの記録の集積が本誌である。

開学当初の、これに伴う諸般の多忙な業務の傍わら、教職員が集り、小人数ながら質問、討議が行われたその会合の様子も今は懐しい思い出の一駒である。

一日も早く、本学に学会が誕生し、その会誌が発刊されることを祈りたい。本誌の刊行はその輝かしい前駆である。本会誌編集に携わられた委員各位の御努力に感謝し筆を擱く。